序　章

『聖書』を〈生きていくこと〉の中心にすえてから四十年あまりが過ぎました。聖書は信仰の旅路を支える確かな杖です。年ごとに紐とく頻度が増していくのは、それだけ私にとって神への渇仰が高まっているからです。

その道すがらで、書中の女性たちに心惹かれ、時に彼女たちのドラマにわが身を重ねて追体験を試みることもありました。中でもマグダラのマリヤ、サマリヤの女、マルタ、マリヤの姉妹たちには友人のような深い親密感を抱きました。姦淫の女と記される女性が目に入った時は、最初の二文字を指の先で隠してあげたいような同情心があふれてきました。と、同時に、なぜわざわざこのような女性が登場しなければならないのかとまじめに疑問を抱いたこともありました。

その彼女たちが全員、『ヨハネの福音書』出身者であることに気がついたのはずいぶん後になってからです。『ヨハネの福音書』は「はじめにことばがあった」と言う有名な一句で扉を開きます。高邁（まい）な思想の展開を予想させる思惟に富んだ冒頭です。この一文は古来から信仰者

と否とを問わず、多くのジャンルの人々の心を捉え、大きな感銘と影響を与えてきたことは周知のとおりです。さらにこの書は文章そのものも格調が高く、聖書を一宗教書から一躍世界文学の名作の座に引き上げるのに多大な貢献をしました。

そこに、四人の女性が活写されているのです。彼女たちの身元を洗うと、ある者は素姓いかがわしく、ある者は明白な社会的脱落者です。同性を差別するわけではありませんが、少なくとも『ヨハネの福音書』を郷里とするのに似つかわしい人たちとは思えません。

でも、ヨハネはそうした女性をあえて登場させました、それも、ひとりひとりにかなりのスペースを設けて、です。

なぜ…。

疑問の鍵束を握ったまま、私は聖書とともに小さな人生を生きてきました。

最近になって、ふっと、思いがつき当たりました。疑問を解く一因が見えたのです。作者のヨハネ自身が鍵穴であると思ったのです。

ヨハネは、定説ではイエスに最も愛された弟子ということになっています。若き漁師時代はその職業の人にありがちな荒々しい気性を持ち、イエスにたしなめられるほどの激情家でした。とうとう〈雷の子〉と綽名(あだな)されてしまいました。

が、それは後世にいたってなんと〈愛の使徒〉ととびきり名誉な代名詞に変換されたのです。ヨハネはまた『ヨハネの手紙』で、『神は愛である』の名句を生んだ人です。これはあまりに有名です。ヨハネはイエス・キリストの愛によって新しい人に変えられたのです。

四人の女性たちは『神の愛』によって新生したヨハネが『神の愛』という名筆を用いて著した書と言えます。彼女たちもまたヨハネと同じに、イエス・キリストの愛によって〈新しい人生〉をいただいた人たちでした。ヨハネは彼女たちに自分の分身を発見し、自分を重ねたのです。

私もまた神の愛によって新しい人生をいただいた一人です。彼女たちは私の中に自分たちの分身を発見したのか、私の小さな創作魂にしきりにエールを送ります。彼女たちを歓迎したことは言うまでもありません。ささやかですが想像の衣装を着込んでヒロインの椅子に座してもらいました。

ヨハネが彼女たちを愛の筆に載せてから世界は二千年の歴史を歩き続けました。現代は四人の女性たちが生きた頃とは文化も習慣も常識も価値観もすっかり姿変わりしました。でも、人間の心はちっとも変わってなんかいないと、私は思うのです。いつの時代だって悲しいことは悲しいし、辛いことは辛いのです。人は根源のところで、だれかに理解してもらいたい、まるごと受け入れてもらいたい、ゆるしてもらいたい、永遠の愛で愛されたいと、せつなく悲しく

叫び続けているのです。ペンの先から、女性たちの魂のうめきを聞いているうちに、そんなことがあたりまえにわかってきました。そうそう、序章での長談義は禁物。まずは第一話の扉を開けましょう。